

# 「老い」と「ケア」に直面する キリスト教の可能性の一考察

「浦河べてるの家」に学ぶ  
—コミュニケーションとケアの神学—

A Consideration of Possibility  
in Christianity facing “Aging” and “Caring”  
— Theology of Communication and Care —  
learned from “Urakawa Bethel”

下村 優

Masaru SHIMOMURA

はじめに

- 第1章 キリスト教の課題としての「老い」と「ケア」
- 第2章 「べてるの家」の理念
- 第3章 「民衆の歴史」に聴く営み、罪責の告白
- 第4章 「悩む教会」の苦労と祈り
- 第5章 存在の救済
- 終わりに 可能性としての「コミュニケーションとケア」

はじめに

本稿は、「老い」と「ケア」という人類史的な課題に対して、「浦河べてるの家」から学ぶことを通して、現代のキリスト教の可能性の一端を読み取ろうとした試みである。言葉を解することができなくなった高齢者当事者と当事者家族を念頭に、「べてる」の理念、「民衆の歴史」に聴く営み、「悩む教会」の経験、キリスト教における言葉の壁、義認論の問題、あるがままの存在の救い、を論じ、「コミュニケーションとケア」をキリスト教の可能

性として考察してゆく。

「浦河べてるの家」は2005年発行の『べてるの家の「当事者研究」』で次のように紹介されている。

「社会福祉法人「浦河べてるの家」（小規模通所授産施設2ヶ所、グループホーム3ヶ所、共同住居3ヶ所）と、有限会社「福祉シヨップべてる」からなる共同体。主に精神障害をかかえた16歳から70歳代までの約150人が、北海道浦河町で多種多様な活動を行っている<sup>1</sup>。」

発展を続ける「浦河べてるの家」の近況については、たとえば2006年9月21日発行の「ようこそ！べてるの家へ」（社会福祉法人 浦河べてるの家）が詳しい。

## 第1章 キリスト教の課題としての「老い」と「ケア」

「老い」と「ケア」という課題は現代の日本社会においてキリスト教が直面する大きな課題の一つである。少子高齢化が進み、医療制度や年金制度への信頼が揺らぐ中、若年層においても経済的格差の拡大が危惧されている。

特に、「老い」に直面している世代が、第二次大戦時の戦禍を生き延び、敗戦後の貧しさの中を生き抜いた世代であることを考えると、若くして戦争に駆り出され、老いて再びなぜ苦しまざるを得ないのかというやりきれなさを感じる。GDPが世界第2位である国でなぜ担い手であった人々の老後に安心をもたらすことすらできないのかが問われなければならないであろう。

それと同様に、特に「認知症」に代表されるように社会的弱者とみなされる高齢者当事者とその当事者家族にとって、社会的介護（ケア）経験の浅い現状において、キリスト教はどのようなメッ

セージを語りうるであろうか。キリスト教宣教課題として緊急かつ重大な問題に直面しているというのが筆者の認識である。

日本はキリスト教信徒が人口の1%と言われ、99%の日本人がキリスト教信仰を持たないのが現実である。「老い」という人類史的緊急の課題に直面する現在、1%の信徒を選ばれた民とする考え方も、「伝道」を課題の解決策として論ずる考え方もあるだろうが、本稿ではそれらの考え方に立たない。本稿が想定する「老い」の課題の当事者とは、現在99%のキリスト教信仰を持たない人々が直面する「老い」であり、「認知症」に代表されるような、すでに言葉の理解力を失ってしまった、あるいは失いつつある当事者と模索しながら共に生きる当事者家族である。そして、彼ら彼女らに対するキリスト教宣教の可能性について、言葉と実践の両面についての考察を行いたい。

## 第2章 「べてるの家」の理念

前章で指摘したキリスト教の課題としての「老い」に鋭い示唆を投げかけているのが「べてるの家」である。何故、高齢者の施設でもない「べてるの家」に課題についてのヒントを見出すのか、それは次の理由による。「老い」と「ケア」を社会的弱者としての高齢者当事者と当事者家族の直面する課題とみなすことによって、精神病の当事者と当事者家族の直面する課題は共通点が多い。そこから、「べてるの家」における実践や知恵が参考になる。すでに「老い」の課題を「べてるの家」と結びつけて考察した例として、大阪大学の哲学教授である鷺田清一氏を挙げなければならない。「老い」と「べてるの家」との接点について、鷺田は『老いの空白』（弘文堂 2003）の中で、「<老い>を論じて、なぜ、わたしはこんなにも長く精神障害体験者のグループホームであり共同作業所である「べてるの家」の試みにこだわることに

なったのか。それは、〈老い〉への問いを障害への問いにリンクさせる必要があったからだ。<sup>2</sup>」と書いている。鷺田は「べてるの家」を「「ある」という視点から、「する」を規準とする社会を撃つ試みである<sup>3</sup>」と解釈した。そして「ただ「いる」というそれだけで価値が認められるような、ひとについての見方、それが「高齢者問題」では賭けられている。<sup>4</sup>」と論じる。

「ある」「いる」という存在そのものが価値を認められる社会、人についての見方、それらのモデルを鷺田は「べてるの家」の試みのなかに認めた。そして、ジャン＝リュック・ナンシーの「無為の共同体」、エマニュエル・レヴィナスの「非全体性の思考」が高齢者の「家」でこそ験されると論じて、具体的モデルとしての「べてるの家」を「特異な者たちが合して一つの身体をかたちづくるというよりも、むしろ特異な者たちが特異なままで気ままに接触しては離れるウェブかネットワークのようなもの<sup>5</sup>」とみなして、その運動と展開を評価している。「べてるの家」の全体像をウェブかネットワークのようなものとみる鷺田の比喩は的を射ている。キーパーソンや当事者や当事者家族が網の目のように複雑なネットワークを構築し、それらの総体が「べてるの家」という世界であるように筆者も考える。

また「痴呆」という症状において、「べてるの家」内部でも早くから気づきがあったことを、浦河日赤病院の精神神経科部長である川村敏明医師は質問に応じて次のように答えている。

「痴呆のことを勉強しなければとずっと思っていました。人間関係が壊れていく、途切れていくことも、痴呆のひとつの原因になっていくという感触を、われわれはべてるの活動をしながらもっていたので、三好春樹さんの痴呆についての発言はある意味ですごく精神病の世界と一致していると思った。べてるでも、いずれ痴呆老人のグループホームをつくらうという意見

が出ています。痴呆へのアプローチにべてるの経験は、プラスになるはずという予感はずっとあったのです。(中略) 彼らには支援を受ける側としての自分たちの体験があるからです。どんなことが支援になるのかというセンスをもっている人たちです。(中略) べてるの理念を基盤に、支援をする側も受ける側もお互いにしっくりくるようなやり方が、僕はあるんじゃないかと思うのです。

だから、「べてる」イコール「精神病の世界」と思っていたけれども違うのです。べてるは、必要とされるところにはどこにでも行くのです。あらゆる角度から人間の生活への支援に行きます。それについては、痴呆老人への支援は最高なのではないかと思っているんです。」<sup>6</sup>

鷺田氏、川村氏ともに「古い」と「ケア」と「べてるの家」の接点をそれぞれ指摘している。次に「ある」「いる」という存在そのものが価値を認められる社会、人についての見方、の実践的試みの中から結晶化されてきた「べてる理念」について特に「古い」と「ケア」に示唆を与えると考えられる代表的なものを三つだけ選び、向谷地生良氏の文章からポイントを引用して以下に記す。

#### (1) 弱さを絆に

「もっとも長く親しまれ、べてるの家そのものをあらわす言葉<sup>7</sup>」と向谷地氏自身書いている。「弱さとは、強さが弱体化したものではない。弱さとは、強さに向かうための一つのプロセスでもない。弱さには弱さとして意味があり、価値がある—このように、べてるの家には独特の「弱さの文化」がある。」<sup>8</sup>

## (2) リハビリテーションからコミュニケーションへ

- ▼トータルコミュニケーション（心・身体・自己・他者・地域・社会・歴史との和解、共生的関係の創出）
- ▼「場」全体の回復
- ▼精神障害者、家族、地域等のつながりの回復<sup>9</sup>

## (3) 三度の飯よりミーティング

「関係に挫折し自信を失ってきた一人ひとりが、もてる力を発揮するためには、「関係」において回復し、関係のなかで自信をとりもどしていくしかない。その意味で「ミーティング」とは、問題を出し合い解決する場ではなく、傷つき、自身を失いやすい者たちがお互いを励ましあうプログラムとしてある」<sup>10</sup>

ほんの一例であるが、こうした「べてるの家」の理念や知恵を「べてるの家」の著書から学ぶことは、キリスト教の課題として「老い」や「ケア」に向き合いアプローチする方法として有効であるだろう。すでに各分野の方々によって注目され学際的な研究も広く行われている。医療機関、自治体に加えて企業も「べてるの家」に熱い視線を注いでいる。産官学の「べてるの家」共同研究が進行しているのが現状である。

現在の「べてるの家」が成功モデルとして各方面から賞賛を受ける存在になり、地域への経済的効果をもたらすまでに成長したことも喜ばしい成果といわねばならない。

本稿では、次にこうしたアプローチの重要性を認めた上で、貴重な理念を産み出し現在も進化を遂げている（降りてゆく）現在の「べてるの家」ではなく、あえて20年前の創立時代に注目し、キーパーソンの一人である宮島利光牧師の言葉に焦点を合わせた。

### 第3章 「民衆の歴史」に聴く営み、罪責の告白

『元浦河教会創立百周年記念誌』（1988）のなかには、元浦河教会（浦河公会設立以来）の100年の歩みを振り返って、宮島利光牧師が書き記した次のような箇所がある。

「元浦河教会は、北海道でアイヌ人口の最も多く暮らしている日高の地に百年にわたり存在しつづけてきた。

しかし、教会の記録からも、赤心社の記録からもアイヌ民族への働きかけについては、ほとんど見るべきものを見い出すことができない。

教会のたっているこの大地には、「開拓」という美名のもとに生存権さえも奪われて憤死していった先住民アイヌの血がしみ込み、骨が埋まっている。この大地で宣教する教会は、その土の中から叫んでいる「血の声」（創世記4：10）に聞く耳を持たねばならない。

また、この大地で、囚人労働者やタコ労働者が苦役し、強制連行されてきた朝鮮人・中国人が、虫ケラのように殺されていった民衆の歴史があったことを忘れるわけにはいかない。

今、元浦河教会の百年の歴史をふり返るとき、教会はこれらの民衆とどのように関わり、どのような連帯をしてきたのか、主のみ前で激しく問われていることを思う。この教会の第三世紀を歩みだすために、今、主がこの地で何をなさろうとしておられるのかを、私共は日々新たに聞きとってゆきたい。」<sup>11</sup>

百周年記念誌に掲載される内容としては、教会の歴史を批判的にとらえた厳しいメッセージと言わねばならないだろう。浦河公会から元浦河教会にいたる宣教の歴史をふり返ったとき「民衆（アイヌ民族、囚人労働者、日雇労働者、強制連行された朝鮮人・中

国人労働者)の歴史」に聴く耳を持つことがいかに困難なことであつたかを牧師自らが吐露したものと読む以外にない。民衆との関わりと連帯の欠如を指摘し「主のみ前で激しく問われている」と訴え、そして「今、主がこの地で何をなさろうとしておられるのかを、日々新たに聞きとってゆきたい」と自らの課題として受けとめる内容になっている。

宮島は1980(昭和55)年～1988(平成元)年まで元浦河教会と浦河伝道所とを兼務した。1956年4月に設立された浦河伝道所の旧会堂が後の「べてるの家」となる。(元浦河教会から少し南に離れた町役場に近い教会で、本稿では浦河教会と呼んでいる。)

浦河教会と「べてるの家」の関係について、百年に及ぶ元浦河教会の歴史と「べてるの家」とを安易に結びつけることは、宮島の言葉に接した後では危険であると感じる。「べてるの家」は元浦河教会の百年の宣教の継承として生まれたものでは決してない。むしろ、まず従来の宣教に対する批判と反省とが根底にあって、変革の過程を経て「べてるの家」創立の準備がなされていたとわれわれは考えなければならないだろう。開拓の美名のもとで、100年に及ぶアイヌ民族への差別、言葉と文化と土地を奪い、人間の尊厳に無関心であった歴史。そこに教会が教会として立つ意味を宮島は根底から問い、祈ったのであった。

齊藤道雄氏もべてると教会とを安易に関連付けることに釘をさす。宮島夫妻の働きを齊藤は次のように評した。

「浦河で二人がしたことは、私の貧しい知識のなかに位置づけられている従来の教会やキリスト教のしくみからあらわれ出たものとは思えなかった。(中略)「教会」よりも「キリスト教」よりも、なによりもまず目の前の弱きものたちに目を注ぎ、と

もに悩み、迷い、苦勞しながらそこにたたずんでいたと思えるのである。そしてそれこそがキリストの教えだと信じたのではなかったか。<sup>12</sup>」

宮島の宣教が「従来の」教会伝統の継承とは異なるという点においては齊藤と同意見である。しかし、齊藤は民衆の声を聴こうとする宮島の姿勢を教会やキリスト教の宣教としてはとらえていない。結局、齊藤は「べてるの家」と「教会」の出会いを「偶然の一致」とさえ表現する<sup>13</sup>。筆者はその点では齊藤と意見が異なる。宮島の宣教とは従来の教会やキリスト教のしくみのなかで切り落とされてきた社会的弱者の声を聴こうとするものであって、宮島の批判の根底にあるのは「罪責の告白」であり、教会とキリスト教の本来あるべき姿である。したがって、筆者は宮島の言葉のなかに宣教の営みとしての「べてる」、そして現在の「べてるの家」の源流の水脈の一つを見出すのである。それは「解放の神学」や「民衆の神学」に学んだ宮島の、地元浦河の「民衆の歴史」に聴くという地道な営みである。

#### 第4章 「悩む教会」の苦勞と祈り

1978年4月に浦河日赤病院医療相談室に向谷地生良氏がソーシャルワーカーとして着任した。3ヶ月後の78年7月、当事者である佐々木実氏（現在、社会福祉法人 浦河べてるの家 理事長、有限会社「福祉ショップべてる」社長）の退院を機に、回復者クラブ「どんぐりの会」が活動を開始。浦河教会が無牧であったため、浦河教会旧会堂に79年4月から向谷地が留守番をかねて入居し、宮島が牧師として赴任した80年8月、旧会堂を正式に住居として提供、旧会堂は共同住居となり佐々木実氏が入居、83年からは早坂潔氏（現在、社会福祉法人 浦河べてるの家 代表）が入居

して共同生活が始まった。旧会堂は「どんぐりの会」の活動拠点となり、1984年4月、宮島は「べてるの家」と命名したことから、「べてるの家」の名付け親とされている。

宮島による「べてる」命名には、ヘブル語の「ベテル」すなわち「神の家」という意味と、ドイツのビーレフェルトに赴任した牧師ボーデルシュヴィンクによる癲癩病患者のための施設に始まる「ベテル」の町の理想があったと、宮島美智子氏は書いている<sup>14</sup>。「ベテル」という具体的なモデルを指し示しえたことは宮島の最大の功績のひとつであるだろう。

宮島の赴任後、アルコール依存症である親の暴力から逃れる子供が教会に飛び込んでくる、礼拝中の独り言、突然質問する人、礼拝中に何度となく出入りを繰り返す人、地域の非難の声、こうした試練に教会が直面し、その中で、向谷地は「地域のなかでさげすまれ、遠ざけられている人たちが教会に集うということは、教会と、そして教会に連なるひとりひとりが共にその立場に立つことなのだということが身にしみてわかった」<sup>15</sup>と当時を回想している。

向谷地は試練に直面する浦河教会を「悩む教会」と呼んだ。「今まで出会うことのなかった彼らの悩みを共に悩み、共に挫折し、共にとまどい、無力のなかでただ祈るしかない悩み多い教会の現状のまえにひれ伏したとき、そこには「悩む教会」という新しい可能性と希望が与えられたのである<sup>16</sup>」。

この時代を、教会員も宮島夫妻もよく耐え抜いたが、向谷地は教会の根源が問われたという。

「人間が弱さをきずなにしてい、ともに生きようとする群れとしての教会をそこに見たのでした。教会とはなにかという根源を問うているようでした<sup>17</sup>」。

1989年の講演「弱さをきずなに」の中で向谷地は、浦河教会ではすでにハンディキャップを負った人が多数を占め、「健常者と共にある教会形成」が浦河教会における現実的課題であると語っている<sup>18</sup>。宮島の在任中、浦河教会はハンディキャップを負った人が多数を占めるように変貌を遂げていた。

宮島夫妻の住む浦河教会と「浦河べてるの家」が隣り合っていたこと、この物理的距離、精神的距離の「近さ」が決定的に重要であったと筆者は考えている。それはもちろん宮島が最初から計画したものではなかった。事実、向谷地が無牧の時代に住み込み始めたのがきっかけであったし、佐々木氏、早坂氏ら共同住居のメンバーこそが決定的な存在であることは決して否定されてはならない。しかし、宮島夫妻の存在があって、隣りあう「近さ」の中で、悩む教会としての新しい浦河教会、「べてるの家」の歩みが始まっていたことを軽んじるべきではないだろう。

1988年は「べてるの家」にとって危機的な苦難が重なった年であった。この年、宮島が浦河教会を離任して滝川二の坂教会に移り、向谷地が勤務先の病院から精神科病棟への出入り禁止・精神科患者との接触禁止を言い渡され（5年に及ぶ）、日高昆布の袋詰め下請けの仕事が打ち切られた。

向谷地は84年4月の「べてるの家」の誕生から10年を「坂道を転がり落ちた10年」と呼んだ<sup>19</sup>。同時に彼はその10年がくれた「出会い」として、小山直氏ら地元の企業経営者ら企業人と親交を結びえたことを重視する。90年12月に向谷地と小山氏とが出会いを果たした。当時「べてるの家」ではすでに、88年12月に日高昆布の自主販売がスタートし、翌89年には「福祉ショップべてる」を開業していた。向谷地は小山氏との出会いを通して、「みなさんと出会ってはじめて、自分もこの町の『住人』になったような気がする<sup>20</sup>」と地域住人としての自覚を深めていった。90年末の出会いの後、小山氏を通して、翌91年だけで4回も地

元浦河での地域と「べてるの家」との交流会が開催された。小山氏を通してさらに清水義晴氏ら浦河から遠く離れた企業人の知るところとなり、賛同者による「べてるの家の本製作委員会」により、翌92年3月には『べてるの家の本—和解の時代—』が発行された。まえがきを小山氏が書き、あとがきを清水氏が書いているのはこうした経緯による。

向谷地は「地域で苦勞しながら商売をしているごく普通の人たちとの出会いが、べてるの進む方向を決定づけた<sup>21</sup>」とする。

この「べてるの家の本」出版の後、ビデオ製作やテレビドキュメンタリー、関連書籍発行が相次いだ。「べてるの家」の扱う事業は拡大を続け、社会福祉法人と有限会社以外にいまや「一人一起業」のもといくつかの会社が設立され、株式会社組織もスタートした。「当事者研究」の一大潮流の中心にもなった。

宮島が離任した直後から、試練を乗り越えながら「べてるの家」が地域の企業人との出会いを通してめざましい成長を続けてきたのは紛れもない事実である。しかし、宮島の存在がそれによって過小評価される理由にはならない。

向谷地は84年の「べてるの家」設立当時の「地域全体の社会復帰」という理念が一貫して変わっていないことを2002年次のように回顧した。「当事者も地域住民もともに地域の課題を担い合い、住みよい町づくりに知恵を出し合う時代がやってきた。べてるの家が20年前に掲げていた「地域全体の社会復帰」という理念が、いま、具体的なイメージとして見えはじめている<sup>22</sup>」

この向谷地の言葉は、「べてるの家」が現在も設立以来の理念の実現に向けた旅の過程にあることを示している。「悩む教会」、「坂道を転がり落ちた10年」、「弱さをきずなにして出会い、ともに生きようとする群れとしての教会」という「べてるの家」がたどってきた苦勞からもわれわれは学ばなければならないであろう。そして「悩む教会」の時代を支えたのが宮島夫妻であり、宮

島の言葉にあらわれる宣教のとらえ方ではないだろうか。もし現在の「べてるの家」の果実のみに執着する場合、大切なものを見失う可能性があると考ええる。つまり、たとえば「健常者と共にある教会形成」という理念には、健常者ばかりのほとんどすべての教会の現状においては、単に耳障りのよいキャッチフレーズに触れただけで終わってしまう可能性が高いことを指摘しなければならないだろう。健常者より障害者の数が増える過程においてどのような悩みや苦労や祈りがあったのか、「悩む教会」のなかで生まれた理念を、「悩む教会」であることを避けてわれわれは学ぶことができるだろうか。これは課題として残る。

## 第5章 存在の救済

「老い」と「ケア」に直面するキリスト教の可能性を考察する際に、立ちはだかる壁がある。そこにはキリスト教のありよう自体を問う根本的な問題提起が含まれていると筆者は考える。それは「言葉・言語」の絶対的な壁と「義認論」の問題である。たとえば「認知症」という症例を例にとれば、聖書を読めず、聴けず、理解できず、教会に足を運ばず、信仰理解も告白もできない、意思疎通不可能、という具体的なケースが容易に想定できる。「言葉」を媒介にした「信仰義認」はここでは限界を露呈する。しかしながら、これはそもそも健常者からも本来問われ続けている問題でもある。2000年前のローマ帝国で誕生したキリスト教について、膨大な量の当時の聖書の翻訳文（言語）を読解し、翻訳された欧米の伝統的な信仰告白文（言語）を信じて告白するということは、現代日本の文化と社会のなかでは理性を犠牲にすることなく決断するのは容易ではないだろう。決断を迫るという前提も無理がある。同様に言葉に立脚する「伝道」を問題の解決策と結論づけることにも無理がある。

究極的な「老い」の問題はただ存在をもって救われる以外にない弱さを抱えた人間状況にあると言い換えることができる。

「言葉・言語」の壁と「義認論」の問題を克服するヒントは渡辺英俊氏の論考において示唆されている。つまり、パウロにおける「イエス・キリストの十字架の救い」が提示する義認論の射程として、「万人罪人」論に対応する「万人義認」論を、「信仰義認」は「不信仰義認」にまで貫徹される論理を含んでいるという解釈である。渡辺は次のように論じた。

「都市社会下層に位置する〈オイコス〉の、引き裂かれた人間関係に置かれた人々を平等の関係で結び付ける根拠は、万人が罪人であったときに、万人のためにキリストが死んでくださったという事実…、そこに示された「神」の、万人を罪人のままで（「ただで」）受け入れようとする「恵み」である。「信仰義認」は、「不信仰義認」にまで貫徹される論理を含んでいるのである。<sup>23</sup>」

渡辺の解釈によってはじめて「老い」と「ケア」に直面するキリスト教の可能性として、「ある」という存在自体をもって義とされる「存在義認」が射程にとらえられる。あるがままの存在の救済が射程に入る。信仰義認は存在義認にまで貫徹される論理を含むものとして、絶対他力の「恵み」による万人の救いが論理的に、「イエス・キリストの十字架の救い」において説明可能となる。選ばれたものだけではない創造され存在するすべての者に等しく恩寵が注がれることを説明可能にする。

本章では、存在義認がパウロの義認論の射程においてとらえることを論じた。言葉の壁、義認論の問題に直面し苦悩する具体的な場面においては、高齢者当事者と当事者家族にとって、可能

性が閉ざされていないということが重要だと筆者は考える。この展開を可能にした渡辺の「パウロの義認論」と「コトバ」に関する論考は決定的に重要であった。

## 終わりに 可能性としての「コミュニケーションとケア」

本稿では、「老い」と「ケア」という人類史的な課題に対して、「浦河べてるの家」から学ぶことを通して、現代の基督教の可能性の一端を読み取ろうと試みてきた。(必ずしも言語に限定されない)対話のためのコミュニケーションとケアとは、弱さを絆とした関係性の回復のために、人間に備えられた特別な能力であり営みであると考え。「老い」と「ケア」に直面する現代基督教の可能性として「コミュニケーションとケア」を拓いていくことが求められている。「ケア」が課題であると共に可能性であるのは、「ケア」の重要性を端的に示したものである。この「ケア」という課題と可能性をいかに拓いていけるかに、前章までで論じたテーマは集約されてくる。したがって各章は、次のように置き換えることもできる。

- 第2章 「べてるの家」の理念を活かしたコミュニケーションとケア
- 第3章 コミュニケーションとケアの土台となる「民衆の歴史」に聴く営み、罪責の告白
- 第4章 「悩む教会」の苦勞と祈りに学ぶコミュニケーションとケア
- 第5章 存在の救済としてのコミュニケーションとケア

筆者は本稿において「べてるの家」に学ぶ考察の結論として、基督教の可能性としての「コミュニケーションとケア」を指

摘するに至った。逆に「コミュニケーションとケア」を考察するアプローチをとった場合においても、筆者は具体的ケースとして「べてるの家」を取りあげるであろう。このことは、「べてるの家自体」が、問題も挫折も試行錯誤も含めた上でなおキリスト教の「可能性」であり続けているという考え方である。

「老い」と「ケア」に直面するキリスト教の可能性として、「コミュニケーションとケア」と同時に「べてるの家自体」を「可能性」の一つととらえたい。これが本稿の結論である。

もちろん、「コミュニケーション」や「ケア」を現場における実践的側面、あるいは「べてるの家」の実践的側面—たとえば医療、看護、福祉、経営、組織など—に焦点をあてた場合、本稿とはまったく異なった考察や結論が可能であるだろうが、本稿がそれらを網羅したものでないことは改めて言うまでもないであろう。

---

#### 【注】

- 1 p.300『べてるの家の「当事者研究」』浦河べてるの家 医学書院 2005
- 2 p.179『老いの空白』鷺田清一 弘文堂 2003
- 3 p.184 同上
- 4 p.132 同上
- 5 p.218 同上
- 6 p.12「常識と現実にこだわる —べてるの家の非援助論—」月間ブリコラージュ ブリコラージュ 2002 4月号
- 7 p.188『べてるの家の非「援助論」 そのままでいいと思えるための25章』浦河べてるの家 医学書院 2002
- 8 p.196 同上
- 9 p.185 同上
- 10 p.94 同上
- 11 p.5『元浦河教会創立百周年記念誌』元浦河教会 1988
- 12 p.45『悩む力 べてるの家の人びと』斉藤道雄 みすず書房 2002
- 13 同上
- 14 p.23『べてるの家の本—和解の時代—』べてるの家の本製作委員会編 1992

- 
- 15 p.20 『「べてるの家」から吹く風』向谷地生良 いのちのことば社 2006
  - 16 p.22 同上
  - 17 p.42 『悩む力 べてるの家の人びと』齊藤道雄 みすず書房 2002
  - 18 p.187 『べてるの家の本—和解の時代—』べてるの家の本製作委員会編 1992
  - 19 p.24 『べてるの家の非「援助論」 そのままでいいと思えるための25章』浦河べてるの家 医学書院 2002
  - 20 p.4 同上
  - 21 p.27 同上
  - 22 p.28 同上
  - 23 p.219 「パウロにおける義認論の射程—「教理」は「運動」であった」『旅人の時代に向かって 21世紀の宣教と神学』渡辺英俊 新教出版社 2001

【主要な参考・引用文献】

- 「「古い」と「ケア」が問うキリスト教の課題の一考察—個人的事例を基点にして浦河「べてるの家」に学ぶ—」  
下村優 「福音と世界」 2006.9 新教出版社
- 『べてるの家の本—和解の時代—』べてるの家の本製作委員会編 1992
- 『べてるの家の非「援助論」 そのままでいいと思えるための25章』浦河べてるの家 医学書院 2002
- 『べてるの家の「当事者研究」』浦河べてるの家 医学書院 2005
- 『「べてるの家」から吹く風』向谷地生良 いのちのことば社 2006
- 『悩む力 べてるの家の人びと』齊藤道雄 みすず書房 2002
- 『元浦河教会創立百周年記念誌』元浦河教会 1988
- 『老いの空白』鷺田清一 弘文堂 2003
- 「パウロにおける義認論の射程—「教理」は「運動」であった」『旅人の時代に向かって 21世紀の宣教と神学』渡辺英俊 新教出版社 2001
- 「常識と現実にこだわる—べてるの家の非援助論—」『月刊ブリコラージュ 2002 4月号』ブリコラージュ